

環境・原発問題をめぐる映像資料整理の意義と課題

西田, 善行 / NISHIDA, Yoshiyuki

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Journal of Ohara Institute for Social Research / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

694

(開始ページ / Start Page)

14

(終了ページ / End Page)

26

(発行年 / Year)

2016-08-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013401>

環境・原発問題をめぐる 映像資料整理の意義と課題

西田 善行

- 1 映像による記憶と記録——情動の浮上
- 2 多様な寄贈・寄託者による環境アーカイブズの映像資料
- 3 市民運動と映像資料
- 4 映像資料整理の実際と課題

1 映像による記憶と記録——情動の浮上

1995年、NHKは『NHKスペシャル』で「映像の世紀」と題するドキュメンタリー番組を1996年まで、11回にわたり放送した。1895年、リュミエール兄弟がパリで『工場の出口』という映像（シネマトグラフ）を上映して以来、映像は多くの人々の様子を映し出し、映像は時や場所を越えて様々な人々の目に触れるものとなっている。このリュミエール兄弟の映像から始められた「映像の世紀」は、20世紀が「動く映像として記録された最初の世紀」として、世界各地のアーカイブを利用して映像を集め、その映像によって20世紀の歴史を伝える試みであった。2015年、NHKは再び「新・映像の世紀」と題して2016年まで6回にわたり放送した。そこではアーカイブの整備と公開により、未公開映像が発掘されたことが語られている。「ムービーカメラの発明から100年余り。映像は、人類が蓄積した膨大な「記憶」である」というナレーションから始まる本番組は、前シリーズ以上に明確に映像の歴史性を訴えている（NHK、2016）。

こうした映像はかつての出来事にまつわる認知可能な知識を我々にもたらす。例えば『工場の出口』を見れば、視覚的な情報から当時の工場労働者の男性や女性がどのような衣服を身にまとっていたのかといったことが了解できる。しかし映像が我々に伝達するのは認知可能な知識だけではない。伊藤守が情報概念の再検討から導き出したように、足早に工場を去る女性、犬に追われ逃げるように出る男性、談笑しながら出ていく男性や女性たちの姿から、時に「さだかな形を取らぬもの」である「情動」をも受け止めるのである（伊藤、2013）。これは「映像の世紀」の制作統括の河本哲也が映像によって「時代感、空気感を見せること」（NHK、2016）が映像資料を中心に番組を構成した理由としていることとも関わるものである。時代感や空気感が映像で伝達可能なのは、まさに映像が人物の身体性を現前化させることにより、不定形で時に言語化をされない情動まで伝達するからである。

ルイ・リュミエールが撮影した『工場の出口』がそうであるように、映像に映し出されるのは、

歴史に名を残す政治家やスターばかりではない。記録映画として多く残されたのは、むしろ世界各地の一般的な人々の日常であった。こうした映像は歴史の「証人」であり、リュミエールも「生活の再現」（サドゥール、1948 = 1993）を意図して19世紀末の日常を記録したのである。また、人々の日常を記録したのは映像制作のプロだけではない。1920年代には小型化したフィルムがアマチュアカメラマンによる映像の記録を可能としており（後藤、2014）、以降、映画やテレビ制作者だけでなく、市井の人によっても多くの貴重な歴史的記録が映像として残されている。

こうした歴史的に記録された映像を、学術的に利用する試みについては、社会学や社会政策系の研究者の間でも近年注目を集めている。ここ数年でも例えば日本社会学会は2014年に「映像アーカイブズを利用した質的調査の探求」という特集を組んでいるし（石田・山田編、2014）、社会政策学会でも「調査研究における映像資料利用の可能性と課題」という小特集が生まれ（高須他、2016）、筆者もテレビ映像の歴史的資料としての意義について言及した（西田、2016）。歴史的映像の学術的利活用はもはや多くの研究者にとって重要な課題となりつつある。こうしたアカデミックな関心が、大学において映像アーカイブを作ろうという試みの背景となっている。メディア研究者を中心に様々な映像をアーカイブ化する試みがなされており、とりわけ新潟大学の地域映像アーカイブでは、新潟の歴史を伝える視聴覚資料をアーカイブ化し、デジタル化することで、地域での歴史的記録と記憶を共有するという興味深い試みを行っている（原田・石井編、2013）。

環境アーカイブズでも、放送局制作の番組だけでなく、市民活動家や研究者などによって映し出された、様々な環境問題や原発問題をめぐる映像資料を集めてきた。筆者は前身の法政大学サステナビリティ研究教育機構の環境アーカイブズプロジェクトからおよそ6年半、環境アーカイブズの視聴覚資料の整理作業に携わってきた。本稿はこれまでの経験から見えてきた、環境・原発問題の研究や、こうした市民活動に関する映像資料を、アーカイブ化する意義とその課題について記しておきたい。まず次節では環境アーカイブズの映像資料の概要を述べ、その寄贈者・寄託者の多様性から、同一のテーマについても多様な視点から知見を獲得できることを示す。次にたんぼ舎の反原発（その他）映像資料（0014）を対象に、市民運動を映した資料から、その運動についての実態や特徴について豊富な理解が得られることを示す。最後に映像資料の整理・公開・利用に関して、環境アーカイブズで直面した課題とその対応について提示する。

2 多様な寄贈・寄託者による環境アーカイブズの映像資料

環境アーカイブズではプロジェクトが本格的にスタートした2010年以降、多くの資料を受贈、受託（及び収集⁽¹⁾）をしている。この中には公害反対運動、自然保護運動、環境運動団体やその参加者、研究者が所有するポスター、ビラ、議事録、運動団体のニュースレター、冊子、裁判記録、聞き取り記録、メモ・ノート類、新聞切り抜きといった文書資料のみならず、写真、音声・映像資料といった視聴覚資料も含まれている。環境アーカイブズではのべ9つの視聴覚資料のみの資料群

(1) 2011年の東日本大震災と福島第一原発の事故を受け、法政大学サステナビリティ研究教育機構では、「震災・原発問題アーカイブズ」プロジェクトを立ち上げた。その中で震災・原発問題に関する文書資料に加え、放送番組等の映像資料の収集も行った（金、2012）。

があり、2016年4月現在、3つの資料群が公開、1つの資料群の目録が公開されている。これらのビデオテープやDVD、カセットテープなどのファイル（媒体）総量はのべ3,048件となっている（表1）。その他の資料群の一部にも映像資料が含まれていて、一部公開もされている（「0041 佐藤禮子環境ホルモンダイオキシン問題等関係資料」など）。こうした資料も含めると3,200件近くの視聴覚資料が環境アーカイブズに寄贈・寄託されていて、その多くは映像資料である。

ここでは環境アーカイブズの視聴覚資料が、どのような寄贈者・寄託者によって、何を寄贈・寄託されたのか、簡単に分類しつつ説明をする。分類の観点は2点ある。一つは寄贈者・寄託者の類型であり、これは大きく分けると、(a) 専門の映像制作者とそれ以外、それ以外でも (b) 市民運動の団体と (c) 研究者で分けられる。もう一つは映像資料の制作者の類型であり、放送番組や映画など、(A) 専門の映像制作者が手掛けた映像か、(B) 市民や研究者などが手掛けた映像かで分けることができる。

表1 環境アーカイブズ視聴覚資料一覧

受入番号	ファンド名	寄贈者／作成主体	総量	公開状況	ファイル数
0001	土本典昭作品	環境アーカイブズ	DVD13枚 VHS3本 (DVD2枚 VHS1本 追加)	非公開	16
0004	水俣病熊本放送映像資料	RKK 熊本放送	DVD12枚	公開	12
0005	水俣病NHK映像資料	小林直毅	DVD6枚	非公開	6
0014	たんぼぼ舎反原発（その他）映像資料	柳田真／たんぼぼ舎	25箱 (受入時7箱)	一部公開	559
0015	NHK映像資料	小林直毅	DVD1枚 VHS5本	非公開	6
0017	船橋晴俊社会学部授業用映像資料	船橋晴俊	2箱	非公開	76
0030	東日本大震災・原発問題資料	環境アーカイブズ	26箱	(一部公開)	1553
0033	東日本大震災報道番組資料	放送批評懇談会	3箱	非公開	164
0046	NPO環境市民の視聴覚資料	NPO環境市民	2箱	一部公開	85
0047	原子力資料情報室寄贈視聴覚資料	原子力資料情報室	13箱	作業中	571

まず (a) 専門の映像制作者の寄贈した資料として「水俣病熊本放送映像資料 (0004)」がある。これは熊本放送 (RKK) で1969年から2009年までに制作した水俣病に関するドキュメンタリー番組、ドラマなど、計12件の映像資料である (A)。この多くは九州エリアか熊本県内のみで放送されたもので、他地域では見ることが出来なかった貴重な映像である。

次に (b) 市民団体による寄贈・寄託資料群としては、「たんぼぼ舎反原発（その他）映像資料 (0014)」や、「NPO環境市民の視聴覚資料 (0046)」、「原子力資料情報室寄贈視聴覚資料 (0047)」などがある。これらの映像資料群の中には、放送番組や映画 (A) などもあるが、自分や関連団体主催の研究会や集会の様子などの記録映像、あるいは環境問題や原発問題を提起し、教育する自主

制作作品など (B) が多くを占めている。例えば NPO 環境市民の視聴覚資料には、環境市民で制作をした京エコロジーセンターの館内上映ビデオや、環境首都コンテストやグリーンコンシューマセミナー、エコ修学旅行など環境市民の活動を映したもの、また水俣などの地域の訪問を映したものなど自主制作映像が中心で、放送番組についてもその多くは自らの活動を取り上げたものである。

(c) 研究者により寄託された映像資料としては、水俣病事件報道の研究を行っている、小林直毅による水俣病関連の NHK のドキュメンタリー番組 (A) を収集した「水俣病 NHK 映像資料 (0005)」や、環境社会学が専門で、サステナビリティ研究教育機構の機構長であった船橋晴俊が寄託した「船橋晴俊社会学部授業用映像資料 (0017)」などがある。船橋晴俊社会学部授業用映像資料には、公害や環境問題に関する映画やテレビドキュメンタリー (A) に加え、むつ小川原開発と核燃料サイクルのインタビューや講演会などの映像、1989 年から 1992 年までの六ヶ所村の調査の様態なども残されている (B)。また「土本典昭作品 (0001)」の映画や「東日本大震災・原発問題資料 8. メディア 1: 映像 (0030)」の放送番組といった環境アーカイブズでの独自の収集映像 (B) もこの分類に入れることが可能であろう。

これらの映像資料のなかには、水俣病や六ヶ所村の核燃施設の問題など、重複する問題を様々な年代、視点から取り上げているものも少なからず存在する。環境アーカイブズの映像資料によって、市民、研究者、マス・メディアなど、複合的なアクターによる、経年的に映し出された映像から「環境」や「公害」、「原発」をめぐる複合的な言説を浮上させることができるのである。

3 市民運動と映像資料

社会運動とメディア利用

よく知られているように、社会運動にとってメディアは重要な役割を担っている。新聞やテレビなどマス・メディアとの関係でいえば、社会運動がマス・メディアにおいてどのような形でフレーム化され、意味づけられるのかが、その社会運動の認知と拡大において重要な意味を持つ。シドニー・タローはマス・メディアが「集約的アイデンティティの構築とイメージの投影という両方の過程にとって重要なメカニズムとなる」とし、とりわけテレビが可視的なシンボリズムを強調することでこの両方の過程にとって重要な役割を担っていると指摘する (タロー, 1998 = 2006, p.199)。運動は怒りや憎しみといった感情を育成することで打ち立てられていく (タロー, 1998 = 2006, p.195) ため、映像による情動の伝達は、運動の拡大・縮小を占う重要な要素となる (畑, 2011)。その意味で社会運動の担い手は、自らがマス・メディアにおいてどのように言語化され、表象されるのか、大きな関心を寄せる⁽²⁾。

一方で社会運動の担い手自身も自らメディアを使ってその活動を記録、発信している。そしてこうした記録物は同様の活動をしている人々に配られていく。これらの記録物はミニコミ誌のような

(2) これは環境保護運動や反公害運動、反原発運動でも同様である (横山, 2001 齋藤, 2015)。特に現実的空間だけでなく、インターネット上でも自らの運動の PR が可能となったことで、自らのパフォーマンスに対する自覚や戦略はより深まっているといえる (青野, 2016)。

紙媒体だけでない。社会運動の担い手自らがフィルムに収めた自主制作映画（畑，2011）やビデオなどの映像も含まれる。先述の通り環境アーカイブズの映像資料群にも，環境問題や反原発の活動をしている市民団体によって，映画やテレビドキュメンタリーといったプロによる映像だけでなく，自らの団体の活動記録やPRのための映像作品，あるいは他の団体から提供を受けたと思われる映像資料も多く収集されていた。これらの映像は実際にはどのようなものであるのか，その特徴についてみておこう。ここでは多くの映像資料の寄贈を受け，既に整理やデジタル化を終えて一部公開をしている，「たんぼぼ舎の反原発（その他）映像資料（0014）」について，目録や公開された映像をもとにその内容について検討する。

たんぼぼ舎の映像資料の概要

たんぼぼ舎は1986年のチェルノブイリ原発事故を受け，1989年に設立された市民団体である。たんぼぼ舎の映像資料には，設立時の1980年代後半の映像から始まり，環境アーカイブズが寄贈を受けた2010年までの20数年間にわたる17シリーズ，559ファイル，1,371アイテム⁽³⁾，時間にしてのべ1,100時間以上の映像，音声資料⁽⁴⁾が収められている。次ページ表2は本資料群をシリーズごとに分け，各シリーズの媒体別資料数をまとめたものである。

本資料群は寄贈者が行った分類により，大きく3つの種別に分けられる。A群はそれぞれ核，地震といったテーマにより分類されており，8つのシリーズがある（計192ファイル）。B群は地域別に分類されており，7つのシリーズがある（計227ファイル）。C群は未整理のものであり，DVDとVHSでシリーズが分かれている（計140ファイル）⁽⁵⁾。約半数が2000年以降に制作され，媒体の多くがVHS（559ファイル中460ファイル）となっている⁽⁶⁾。

映像からわかる研究・集会の類型——①反原発運動団体主催の集会とデモ

本資料群にはたんぼぼ舎をはじめ，気候ネットワークや原子力資料情報室，グリーン・アクション美浜の会など，様々なNGO，NPO，市民運動団体の主催・共催の集会の様子を記録した映像や，ドキュメンタリーを制作した映像がある。こうした集会や研究会の映像は，反原発運動の活動の実態を視覚的に理解する重要な資料といえる。集会・研究会には，主催者やその形態から，いくつかの類型が存在する。まず①反原発運動団体主催の集会での専門家によるスピーチ，活動家による報告，デモや抗議活動を映したものがある。こうした集会やデモでは，複数にまたがる団体内部の結

(3) 環境アーカイブズの視聴覚資料はVHSやDVDなどの媒体一つを1ファイルとしている。また原則，放送番組は1番組を1アイテム，イベント・講演は講演者やセッションごとに1アイテムとした。ただし中には1分程度の短時間のストレートニュースを数多く録画したものもあり，目録記述の煩雑性などの理由から1番組を1アイテムとせず，すべてまとめて1アイテムとしたファイルが24ファイルある。なお，2016年4月現在，本資料群のうち公開されているのは129ファイル195アイテム（重複除く）である。

(4) ただし音声資料はカセットテープのうち未使用のテープを除く11ファイルのみである。

(5) なお，最後に「0014・たんぼぼ舎反原発（その他）映像資料」資料群概要にあるたんぼぼ舎各シリーズの概要と2016年4月時点での各シリーズの公開ファイル・アイテム数を付した。

(6) 本稿の主旨とは異なるが，これらの記録媒体の数や種類，内容についての分析は，オーディエンスの観点からのメディア史としても有益である（石田，2009）。

表2 たんばほ舎反原発（その他）映像資料の資料群分類一覧

分類 項目群	シリーズ 番号	シリーズ名	箱数	媒体別資料数								
				VHS	β	8ミリ	DVD	CT	CD	FD	計	
A	1	核・原爆（広島／長崎）	1	8								8
A	2	地震	2	43				7				50
A	3	核ゴミ	1	10								10
A	4	プルサーマル	1	8								8
B	5	もんじゅ	2	51								51
A	6	チェルノブイリ	1	27		7						34
A	7	外国	2	18								18
B	8	東海村（JCO）	1	12								12
A	9	風力	1	44								44
A	10	温暖化	1	20								20
B	11	六ヶ所（再処理工場）	1	25	2	3						30
B	12	柏崎・刈羽・巻・福島	2	60		1		2				63
B	13	東京（輸送／空母）	1	15	1	4						20
B	14	浜岡	1	12								12
B	15	関西・北陸（美浜）	2	37		2						39
C	16	未整理	4	70								70
	17	DVD ほか	1				56	3	10	1		70
A群（テーマ別）計			10	178	0	7	0	7	0	0		192
B群（地域別）計			10	212	3	10	0	2	0	0		227
C群（未整理）計			5	70	0	0	56	3	10	1		140
合計			25	460	3	17	56	12	10	1		559

注：CT（カセットテープ）、FD（フロッピーディスク）。

出典：「0014・たんばほ舎反原発（その他）映像資料」資料群概要。

東と外部への反原発のアピールが目指される。先述のタローが指摘した「集合的アイデンティティの構築とイメージの投影」が集会の目的であり、マス・メディアで取り上げられるのもこうした集会やデモの様子である。ただし団体主催の集会やデモを描いたものでも、屋外での大規模な集会から、体育館、会議場、旅館、民家まで様々な場所、規模のものがあり、その内容も公的で一方的なスピーチから、質疑応答のあるセッション、酒も交えた対話まで多様である。

ここで一例として「DIALOG ON MONJU（文殊の対話）」（ファイル番号：0014V0087）という1993年ごろに自主制作されたドキュメンタリー作品を見ていこう⁽⁷⁾。映像はバスで福井県敦賀市にある高速増殖炉もんじゅへと向かう車中の景色から始まる。その後民家での食事を囲んでの集会（酒宴）が進む。しばしば録画日時が画面右下に表示されていて、ホームビデオの映像を組み合わせで作られている印象だが、会話の節目にもんじゅの見える水晶浜海水浴場で泳ぐ人々が映し出され、食事の際の会話がボイスオーバーで挿入されるなどの演出が見られる。例えば「（もんじゅに対する）市民の方々の興味はないんですね」というボイスオーバーに、海水浴場でもんじゅが背景

(7) 制作：NORI SASAKI, 編集：ASAO MATSUMOTO, 88分。

に見えるなかビニールボートで遊ぶ女性数名を映すことで、そのコントラストともんじゅに対する忘却を描いている⁽⁸⁾。

映像は次に1993年10月3日、敦賀で行われた「止めようもんじゅ93全国集会」の様子を映している。集会では物理学者で原子力資料情報室の設立者でもある高木仁三郎のスピーチや、それを聞く人々の様子が映し出されている。その後敦賀でのデモの様子が映し出され、マスクをかぶり仮装して練り歩く人々の姿をカメラは捉えている。これらの一連の映像は、集会のお祭りの様相の一端を示すものといえる。集会の祝祭的な様子は他の映像からも見て取れる。例えば1989年の反原発集会とデモを映した「原発止めよう東京行動 4/23 六郷公園（集会）1」（ファイル番号：0014V0436）でも高木仁三郎⁽⁹⁾や榎田敦ら専門家のスピーチだけでなく、「原発が止まらないなんて／嘘だろ／福島原発の事故なんて／嘘だろ」などと歌う山本コータローの反原発ソングや、上々颱風によるライブパフォーマンス、さらに原発に関連する○×クイズも催されている。

伊藤昌亮（2012）は2011年の福島原発事故以降の反原発デモのスタイルを市民運動型・サウンドデモ型・ピースウォーク型という3つに分類し、本気で要求を訴える市民運動型とどこかお祭りのようなサウンドデモ型を対比的に分析している。ただしこの映像が示唆するように、デモのスタイルはピースウォーク型のデモが興隆する2000年代以前から一様ではない。その意味でこうしたデモの映像を追うことで、日本における反原発デモのスタイルの変遷について、その一端を理解できるだろう。

映像からわかる研究・集会の類型——②研究・調査報告

次に②反原発運動主催の研究会での学者や活動家による報告がある。これは①のようなマス・メディアにしばしば取り上げられる内外へのパフォーマンスを意図したものというより、むしろ自分たちの科学的知を深め、その運動の正統性を確保するためのものといえる。例えばたんぼ舎のメンバーも多く関わっている地震・環境・原発研究会では、1995年の阪神淡路大震災を受けて、活断層型の地震をはじめとする様々な大規模地震の際の原子力発電所への被害について検討している。1996年1月に制作された「1/14 地震と原発全国集会——阪神・淡路大震災から1年・「もんじゅ」ナトリウム大事故を踏まえて」（ファイル番号：0014V0018）では、阪神淡路大震災での地震の性格と被害について解説が行われ、1995年12月のもんじゅのナトリウム漏れ事故との関連で原発事故への警鐘がなされていた。これに類するものとして学会やそれに準じる場での学者、専門

(8) こうした演出はその後も用いられている。本作の後半、映像は「止めようもんじゅ93全国集会」の後に行われたと思われる宗教者による集会を映している。そこで敦賀で反原発運動を行っている人物が「原発に見学に行けば被曝する」という旨の発言をしたのに合わせて、子供が描いた原発の絵を掲示している映像を見せたり、「ドイツやアメリカでは高速増殖炉をストップさせた」という旨の発言に合わせて、日本で活動を行うドイツ人やアメリカ人の活動家の様子を映すなど、ホームビデオに映した映像を組み合わせて、そこに意味を持たせている。

(9) 高木はこれ以外にも「六ヶ所村集会11/12」（ファイル番号：0014V0269）での六ヶ所村の再処理工場の再処理反対集会でのスピーチや、「国際市民会議 [1] 持続可能で平和なエネルギーの未来本会議 (1) 基調講演・特別講演」(0014V0532)での特別講演など、反原発運動や自然エネルギーに関する集会や研究会に頻繁に映し出されている。これは高木が2011年の福島原発事故以降の小出裕章などと同様に、1980年代後半から1990年代末にかけて反原発運動の知を保証する専門家として非常に重要なアイコンであったことを示している。

家による発表、スピーチもある。例えばシリーズ9の風力関連の映像資料は、その大半が風力エネルギー利用総合セミナーや風サミットなどでの風力エネルギーに関する講演や研究報告である。これらの映像は文章資料同様、原発や地震、自然エネルギーなどへの科学的知が市民運動団体によって集積されており、その歴史の変遷を明らかにするものといえる。一方でニュースやドキュメンタリーなどの放送番組でこうした映像を見ることはまれである。

映像からわかる研究・集会の類型——③行政、電力会社などが主催する場での説明会

また、たんぼぼ舎の映像資料にはマス・メディアによっても映し出されることの多い③行政、電力会社などが主催する場での説明会の様子も残されている。例えば2000年2月20日に科学技術庁と東海村の共催で行われた「JCO 臨界事故説明会」（ファイル番号：0014V0190）では「東海村からの説明 JCO 臨界事故の経過と対応・防災とまちづくりアンケート報告」や、「科学技術庁からの説明 JCO 臨界事故の概要と今後の取組・線量評価と健康管理について」といった報告と、「会場参加者からの意見と質疑」がなされていた。また2007年の新潟県中越沖地震による東京電力柏崎刈羽原発の被災を受けて東京電力が制作した「発電所からのビデオレター」（ファイル番号：0014V0392～0014V0394）や原子力発電に関して全国の電力会社側が作成した様々なCMを集め、編集した「CMが語る原発89」（ファイル番号：0014V0521）など、電力会社側のPR映像について収集されていて、原発問題をめぐる複合的な視点からの映像が収集されていることがわかる。

映画・放送番組の録画映像

本資料群の中には、ここまで示したような様々なNGO、NPO、市民運動団体の主催・共催の集会を映した映像や、制作した映像だけでなく、放送局作成の番組を録画したものもある。全体のおよそ25%にあたる、のべ142ファイル、319アイテムが放送番組であった。本資料群の放送番組の内容については別稿（西田，2016）で述べたため詳細には触れないが、NHKのドキュメンタリーをはじめ、地方放送局や海外局制作番組も含め映像は幅広く収集されており、原発をめぐる問題の理解と状況監視の用途に放送番組が用いられていることが了解される。

映像資料からわかること・わからないこと

ここまでたんぼぼ舎の反原発（その他）映像資料から、自らの団体の活動記録やPRのための映像作品、あるいは他の団体から提供を受けたと思われる映像資料の特徴について、集会や研究会、デモなどを映し出した映像の特徴や類型を検討してきた。そこから見えてくるのは、これまでの社会運動論がメディアとの関連の中で取りこぼしてきた、運動の担い手の記録と歴史性、そして知の集積という面での映像の役割である。反原発運動のような活動は一過性のものではなく、少なくとも国内の原発がすべて稼働をやめるまで、たとえ団体の解散などがあったとしても、反原発運動そのものが行われなくなることは考えにくい。その意味で反原発運動の歴史の変遷を組織や運動のス

タイトル、活動の実態、更には運動が依拠している学知⁽¹⁰⁾の変遷を問うことは、運動の意味や可能性を考える意味でも重要である。

本稿で取り上げたのはたんぼ舎の反原発（その他）映像資料の公開された数本の映像と、目録、それと他の資料群の概要からわかることのみである。より多くの映像を視聴すれば、さらに80年代後半から2000年代にかけての反原発運動や自然エネルギーに関する実践や知の蓄積について、その変遷を知ることが可能であろう。ただし文章資料がそうであるように、映像資料もそれ単独で知りうることには限界がある。むしろ映像資料の方が、それ単独で知りうる情報としての知識には限界があり、補足的な情報を様々な形で取り入れることによって初めて映し出された状況を深く知りうるができることもしばしばである。実際デモや集会の形式は、映像から類型化したもの以外にもありうるだろうし、こうした類型が必ずしも社会運動における集まりの形式の全体を伝えているわけではない。映像は素朴にありのままの現実世界を描き出す道具ではない。どのような映像であれ、その作り手が意図を持ってカメラを構え、映し出したものである。それは時にある情動を伝達し、受け手にそれを喚起する。これは一見社会的事実を改変し、偏向させるものと思われるかもしれないが、作り手の認識や伝達される情動への了解も、資料を読み解くための材料であり、映像を研究する際にはこうした態度が必要なのである⁽¹¹⁾。

4 映像資料整理の実際と課題

ここまで環境アーカイブズの映像資料の概要と、たんぼ舎の反原発（その他）映像資料の分析を行い、環境問題や原発問題をめぐる映像を残し、分析することの意義について検討してきた。本節では環境アーカイブズのような中小規模の研究アーカイブが、映像資料を整理し、保存、公開をするにあたり直面するような問題について、特に映像を中心とした視聴覚メディアという特性から起こりうる点を中心に検討し、その対応策について考えていきたい⁽¹²⁾。

目録整理をめぐって

研究者がその資料に当たることができるのは、その資料についての諸情報を開示した目録、インデックスがあるからである。こうした目録はその情報が詳細であり、なおかつ検索が容易であればあるほど、研究者は目的の資料に早く到達できることになる。その意味でアーカイブにおいて、資

(10) ただしここでの「学知」は単純な意味での知識の取得のみを意味するものではない。1節で述べた通り、情報は認知可能な知識のみでなく、その知識の伝達者の身体性や、そのオーディエンスを含めた会場の空気感といった、必ずしも言語化されない情動をも伝達するのであれば、高木仁三郎をはじめとする反原発運動に対する学知を提供する専門家が浮上させる情動性も含め、どのような形で知識が伝達されているのか、その複合的な言説編成も含めて学知伝達の歴史を理解すべきである。

(11) 別稿でも放送番組をめぐる学術的利用の阻害要因について検討したが、根本的には映像一般に同様な問題をはらんでいるといえる（西田、2016）。

(12) なお本節で提示する問題の多くは視聴覚資料をアーカイブ化する際の一般的な問題であり、他の視聴覚アーカイブでもしばしば直面することである（原田・石井編、2013 オーストラリア・アーキビスト協会、2009 = 2011-2012）。

料の目録作成は重要な要素となる。とりわけ映像をはじめ、多くの視聴覚資料は、それを再生する機器によって視聴・聴取しなければ研究者もアーキビストも重要な情報を得ることは困難である。

筆者は当初資料整理の対象が「水俣病熊本放送映像資料（0004）」のような放送番組が多かったため、NHK アーカイブスで行われているような複数に渡る詳細な目録を考えていたが、資料整理にかかる時間の制約など現実的な問題と、環境アーカイブズでの文書資料の目録との整合性を考慮して、より簡素な目録の作成を行うこととした。目録はそれぞれの資料群の特性を考慮して多少項目が異なることがあるが、①ファイル名、②アイテム名、③制作者、④制作年度（放送・撮影年月日）、⑤媒体の形態（VHSやDVDなど）、⑥収録時間、⑦備考といった項目を記入することが基本である。これにたんぼぼ舎の反原発（その他）映像資料のように講演や集会が多くある資料群であれば⑧企画者という項目を入れ、その場を設定した主催者や開催者の項目も付した。

環境アーカイブズの視聴覚資料は、原則1媒体を1ファイルとし、1ファイル中放送番組は1番組、講演や集会などは一人の講演・発表を1アイテムとして区分し、目録入力を行っているが、資料整理にかかる時間の制約もあり、アイテム区分を行っていない資料群もある。また目録にファイル名やアイテム名を記載する際、一般的なルールに従って表題を「見たまま」書くこととし、ビデオテープの背表紙などに付された表題をそのまま記載している。しかしビデオテープにタイトルが書かれていないものや、内容が不明なもの、あるいは書かれたタイトルと全く異なる内容のものもあり、その内容と一致しているのか、確認が必要となる。この点については、確認が比較的容易な文書資料と違い、映像・音声資料は機器を用いての再生が必要であり、手間がかかる。また媒体の種類が複数あれば、その再生に必要な機器も複数必要になる。実際、現在生産されていないβ（ベータ）やHi8（ハイエイト）の再生機については、中古での購入や協力者から譲り受けることで入手したものの、今後機器が故障すれば再生が不可能となる可能性もある。こうした困難はデジタル化を行う際にも同様な問題が発生する。オーストラリア・アーキビスト協会（2008 = 2011 - 2012）は視聴覚資料のこうした特性を「資源消費型の記録」と称しているが、文章資料と比べ、視聴覚資料の整理はより時間や（人件費も含む）資金を要するものといえる。

保存とデジタル化

長期的に資料を使用するという観点からすれば、資料の保存や保管に目を配ることも重要となる。視聴覚資料はその多くが長期的な使用を想定しておらず、文書資料以上に長期的な状態を保持することに注意を向ける必要がある。ビデオテープは高温多湿を嫌い、カビが生えやすい。時には寄贈段階で資料にカビが生えていることもある。カビが生えている場合、自力での除去が難しいため、業者に依頼することになるが、予算の都合もあり、すべてのテープを業者に出すことが難しいことも考えられる。その場合、保存に値するものを選択する必要があるが、カビが生えた状態でビデオデッキに再生すれば、巻き込みなどデッキの故障の原因となるため、外部の表記だけで判断をせざるを得ない。これは「何を保存すべきか」という判断を難しくする。

その他カビが生えていないテープでも、映像や音声の劣化が進行している場合があり、しかもテープの繰り返しの使用は更なる劣化の原因ともなる。そのため、元となる資料は早急にコピーを

し、その後は可能な限り再生を行わず、適切な環境下で保管することが望ましい⁽¹³⁾。環境アーカイブズの視聴覚資料は、資料の利用の簡便さを考慮して mp3 などのフォーマットにデジタル化を行うことが基本となっている。そして利用者が視聴する際には教室などでの授業利用などの可能性も考慮し、これを DVD にしている⁽¹⁴⁾。

ただしデジタル化という作業にはいくつかの問題がある。例えば映像をコピーする際、元の映像の規格のままコピーすることが困難な場合がある。またビデオが劣化すると、そのノイズを映像の保護信号と解してダビングができないということもある。さらに環境アーカイブズでは現在デジタル化したファイルをハードディスクに保存しているが、ハードディスクそれ自体が長期保存という点では必ずしも適切とはいえない。こうした問題には現状では明確な解決策はなく、元資料を極力劣化させない形で保管し、デジタル化したファイルもバックアップを定期的にとるという形で対応している。

公開と利用促進

アーカイブは単に目録記述や保管を行うためにあるわけではなく、その公開によって利用者の便益をはかることも望まれている。ただし視聴覚資料の公開をめぐるのは、様々な問題が存在する。その最たるものが著作権との関係である。先述の通り寄贈者が寄贈した映像の中には、寄贈者自身が作成した映像以外にも放送番組や映画など様々な映像が混在している。特に放送番組はその許諾が公開の大きな制約となる。

ただし、映像そのものの公開ができない場合でも、どのような映像があるのか、その所在を示すうえでも目録の公開・共有は極めて重要である。例えば環境問題、原発問題に関してテレビでいつ、どのような番組が放送されていたのかといった放送内容に関する情報を開示することそれ自体に意味がある。これに関連して、視聴覚資料に限らずこうした目録は、寄贈者や同一資料を持つアーカイブとの共有が重要である。例えば反原発運動関連の資料として、どこにどのような資料が存在しているのか、資料についての情報の共有は、環境問題や原発問題をめぐる資料を収集している立場にある環境アーカイブズが中心となって担う必要があるだろう。その意味で目録のネットワーク化は重要な課題となってくる。

また既に公開されている映像資料の利用の促進も大きな課題である。環境アーカイブズの映像資料は、当初から教育目的の活用が期待されていた。例えば 2011 年 1 月に行われたサステイナビリティ研究教育機構の「第 13 回サス研フォーラム」において、環境アーカイブズプロジェクトに深く関わっていた船橋晴俊は次のように述べていた。

(13) オーストラリア・アーキビスト協会 (2008 = 2011-2012) によれば、ビデオテープの最適な保存条件は室温 8℃・相対湿度 (RH) 30% である。これは紙資料の最適条件とは異なっており、専用の保存庫が必要となる。しかし保存庫の設置には一定程度の予算が必要であり、すべてのビデオテープをその環境下に保管することは難しい場合もある。

(14) 原則、環境アーカイブズの室内の視聴ブースでの視聴であり、学内の授業利用の場合に限り、一時貸し出しを可能としている。

環境アーカイブズのいいところは、映像系、文書系両方持っていて、今どきの若い学生さんにとっては、まず映像系から入るのがよろしいわけです。したがって、学内サービスをこれから大いに充実しようと考えています。環境問題・公害問題のビデオでこういうビデオが欲しいんだけど、全部見たいんだけどといったら、「はい、あります」と、パッと出す。サス研アーカイブズに聞けば、環境教材がばっちりあるというようにしたい。（金・柳田・近藤，2011，p.37）

船橋のこの発言は、映像が単なる知識を提供するものではなく、冒頭で述べた「映像の世紀」と同様に、その情動をも伝達するがゆえのものだろう。その意味で映像資料は教育利用の格好の素材⁽¹⁵⁾であり、環境アーカイブズの映像資料もそうした利用に一定程度の耐えうるものといえる。今後こうした授業利用も拡充すべく利用体制の整備と情報の周知が必要であろう。

（にしだ・よしゆき 法政大学社会学部兼任講師）

【文献】

- 青野恵美子（2016）「社会運動調査におけるインターネット上の映像資料の利用——ウォール街占拠運動の事例から」『社会政策』第7巻3号，90-101頁。
- オーストラリア・アーキビスト協会（2008 = 2011-2012）『キーピング・アーカイブズ Keeping Archives』〈http://bensei.jp/?main_page=wordpress&p=1311，2016年4月20日閲覧〉渡邊美喜訳，勉誠出版。
- 後藤一樹（2014）「〈趣味〉と〈闘争〉——1920-30年代のアマチュア映画の公共性」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 社会学 心理学 教育学——人間と社会の探究』第78巻，109-137頁。
- 原田健一・石井仁志編（2013）『懐かしさは未来とともにやってくる——地域映像アーカイブの理論と実際』学文社。
- 畑あゆみ（2011）「『運動メディア』を超えて——一九七〇年前後の社会運動と自主記録映画」藤木秀朗編『観客へのアプローチ』森話社。
- 石田佐恵子（2009）「個人映像コレクションの公的アーカイブ化の可能性」『マス・コミュニケーション研究』75号，67-89頁。
- 石田佐恵子・山田富秋編（2014）「特集・映像アーカイブズを利用した質的調査の探求」『社会学評論』第65巻4号，454-573頁。
- 伊藤守（2013）『情動の権力——メディアと共振する身体』せりか書房。
- 伊藤昌亮（2012）『デモのメディア論——社会運動社会のゆくえ』筑摩書房。
- 金慶南（2012）「東日本大震災における「震災・原発」の記録化事例研究——法政大学「環境アーカイブズ」の活動を中心に」『アーカイブズ学研究』17号，51-75頁。
- 金慶南・柳田真・近藤ゆり子（2011）『環境アーカイブズとサステイナビリティの探求——サス研フォーラム講演記録集（第13回）』法政大学サステイナビリティ研究教育機構。
- タロー・シドニー（1998 = 2006）『社会運動の力——集合行為の比較社会学』大畑祐嗣監訳，彩流社。
- 小林直毅（2011）「大学教育における「水俣」のテレビドキュメンタリー」『Speech communication education』24号，33-42頁。
- 小林直毅・原由美子（2014）「アーカイブ番組を大学教育に生かす：【第3回】アーカイブ視聴が生み出す効果」『放送研究と調査』第64巻6号，72-92頁。
- NHK（2016）「NHK スペシャル「新・映像の世紀」」〈<http://www.nhk.or.jp/special/eizo/> 2016年5月4

(15) 水俣病などのドキュメンタリーの大学教育への利用について示したものとして、小林直毅らの論文がある（小林，2011 小林・原，2014）。

日閲覧)

西田善行 (2016) 「『史資料』としてのテレビ報道——環境報道アーカイブの取り組みから」『社会政策』第7巻3号, 68-78頁。

齋藤さやか (2015) 「環境 NGO とメディア——気候変動法の制定過程における FoE UK のコミュニケーション戦略」関谷直也・瀬川至朗編『メディアは環境問題をどう伝えてきたか——公害・地球温暖化・生物多様性』ミネルヴァ書房。

サドゥール・ジョルジュ (1948 = 1993) 『世界映画全史 2 映画の発明——初期の見世物 1895-1897』村山匡一郎・出口丈人・小松弘訳, 国書刊行会。

高須裕彦他 (2016) 「小特集・調査研究における映像資料利用の可能性と課題」『社会政策』第7巻3号, 65-112頁。

横山隆一 (2001) 「NGO からみた環境報道」財団法人地球環境戦略研究機関編『環境メディア論』中央法規。

【資料】0014・たんぼ舎反原発（その他）映像資料の各シリーズ概要と公開状況

1. 核・原爆（広島／長崎）：核実験や原発に関するアメリカなどで制作された映画など。計8ファイル23アイテム（広島／長崎関連の映像なし）（公開：1ファイル3アイテム）
2. 地震：たんぼ舎が中心になって行っている地震関連の研究会，集会，シンポジウムの様子など。計50ファイル101アイテム（公開：19ファイル30アイテム）
3. 核ゴミ：核廃棄物をめぐる集会，シンポジウム，意見交換会など。計10ファイル31アイテム（公開：1ファイル1アイテム）
4. プルサーマル：プルトニウム，プルサーマルに関する放送番組や，原子力資料情報室主催の報告会など。計8ファイル11アイテム（公開：6ファイル9アイテム）
5. もんじゅ：もんじゅに関する訴訟集会，廃炉を求める集会，説明会など。計51ファイル129アイテム（公開：23ファイル45アイテム）
6. チェルノブイリ：たんぼ舎によるチェルノブイリへの視察の様子や，集会，放送番組など。計34ファイル64アイテム（公開：15ファイル21アイテム）
7. 外国：国際会議や国際集会，海外番組など。計18ファイル32アイテム（公開：5ファイル5アイテム）
8. 東海村（JCO）：東海村臨界事故関連の番組，集会など。計12ファイル23アイテム（公開：7ファイル17アイテム）
9. 風力：風力エネルギー利用総合セミナーや風サミットなど。計44ファイル172アイテム（公開：なし）
10. 温暖化：気候ネットワーク主催のシンポジウムなど。計20ファイル82アイテム（公開：なし）
11. 六ヶ所（再処理工場）：六ヶ所村の核燃料施設に関するテレビドキュメンタリーや，抗議集会の様子など。計30ファイル63アイテム（公開：11ファイル18アイテム）
12. 柏崎・刈羽・巻・福島：巻町の住民投票関連ニュースを集めたものや，福島原発事故の検証など。計63ファイル129アイテム（公開：9ファイル9アイテム）
13. 東京（輸送／空母）：核燃料輸送に関するニュース，ドキュメンタリーや集会の様子など。計20ファイル44アイテム（公開：11ファイル14アイテム）
14. 浜岡：浜岡原発や建設を中止した浜岡原発に関する集会，勉強会の様子など。計12ファイル15アイテム（公開：7ファイル10アイテム）
15. 関西・北陸（美浜）：美浜原発の事故に関する集会や報道，建設を中止した珠洲原発に関する集会など。計39ファイル87アイテム（公開：9ファイル15アイテム）
16. 未整理：寄贈者による整理が行われていないもの。計69ファイル134アイテム（公開：4ファイル4アイテム）
17. DVDほか：DVDやCDなど，ビデオテープ以外の媒体。およそ半数は他のシリーズのファイルと重複。計71ファイル231アイテム（公開：1ファイル1アイテム）